

【特別講演】世界遺産登録 30 周年を迎えた白神山地～その価値と課題

秋田県立大学 蒔田明史

1 はじめに

1993 年 12 月に屋久島とともに日本初の世界自然遺産に登録された白神山地は、昨年登録 30 周年を迎えました。私は秋田県立大学創立時に秋田に参りまして 25 年が経過しましたが、県立大学赴任前には、文化庁にて文化財調査官として天然記念物の保全管理に関わる仕事をしておりました。文化庁在職時に白神山地と屋久島がちょうど登録 5 周年を迎え、保全状況のモニタリングに来日した国際自然保護連合（IUCN）の専門家の現地視察に同行したことが、仕事上の白神山地との出会いでした。専門が森林生態学ですので、秋田に来てからは、「白神山地世界遺産地域科学委員会」や「あきた白神認定ガイド制定運営委員会」などの委員を務め、また「白神山地ブナ林モニタリング調査会」の活動にも参加してきました。この間、ほぼ毎年白神山地に出かける機会がありました。本日はこれまでの経験も踏まえ、世界遺産としての白神山地の価値と課題についてお話ししたいと思います。

2. 白神山地とは

白神山地は青森県と秋田県にまたがって位置する約 13 万 ha にわたる山地帯の総称です。このうち、大規模な人為的かく乱を受けていない約 1 万 7 千 ha が世界自然遺産となっています(図 1)。核心地域に入ると、見渡す限り人為の影響がみられない森に包まれることができます(図 2)。入りにくい地域ではありますが、最近では YouTube などでもきれいな映像を見ることができ、雰囲気を知ることができます。例えば、WebTV あきた「世界遺産白神山地〈第 1 章 白神の世界〉」では、秋田を代表するガイド、斎藤栄作美さんと後藤千春さんが美しい映像とともに、白神の魅力を述べているので、必見です

(https://www.youtube.com/watch?v=rs5Y7Pr80lk&list=PLVX9ZiK_CR7ucqom9kUEkbonu52kYB-kc&index=3&t=1s)



図 1 白神山地世界遺産地域。濃い網掛が核心地域（東北地方環境事務所より）



図 2. ニツ森から望む遺産地域。見渡す限り人為の影響が全くみられない（蒔田撮影）

3. 世界遺産とは

世界遺産とは世界遺産条約と略称される条約に基づいて登録されるもので、自然遺産と文化遺産、その両方を含む複合遺産とがあります（図 3）。世界自然遺産になるためには、評価基準（図 4）の一つ以上に適合すること、自然の本来の姿が保たれていること、国内法で十分な保護管理が行われていることが必要です。それが認められて初めて所在する国から世界遺産委員会へ推薦できることとなっています。よく「世界遺産にして保護しよう」という言い方をされることがありますが、実は国内で保護の体制ができていないと世界遺産に推薦はできないという仕組みになっており、白神山地の場合も、推薦前に自然環境保全地域や森林生態系保護地域の指定が行われ、国内での保護管理体制が整えられました。

1) 世界遺産とは？

正式名称	世界の文化遺産及び自然遺産の保護に関する条約 (1972年ユネスコ総会で採択；日本は1992年に条約発効)		
目的	世界で唯一の価値を有する遺跡や自然地域などを人類全体のための遺産として損傷又は破壊等の脅威から保護し、保存し、国際的な協力及び援助の体制を確立すること。⇒ 世界の宝をみんなで守ろう		
事務局	ユネスコ世界遺産センター(パリ)		
世界遺産とは	「顕著な普遍的価値(人類全体にとって特に重要な価値)」を有し、将来にわたり保全すべき遺産として世界遺産委員会が認め、「世界遺産一覧表」に記載されたものが世界遺産です。世界遺産には「自然遺産」と「文化遺産」、両方の価値を兼ね備えている「複合遺産」があります。		
	・世界遺産総数	1157件 (25件)	締結国 194
	・自然遺産	218件 (5件)	
	・文化遺産	900件 (20件)	
	・複合遺産	39件 (0件)	
	()内は日本 2023年1月現在		

図 3. 世界遺産の概要

世界自然遺産の4つの評価基準（クライテリア）	
(7) ひとときすぐれた自然美及び美的な重要性をもつ最高の自然現象または地域を含むもの。	<屋久島>
(8) 地球の歴史上の主要な段階を示す顕著な見本であるもの。これには、生物の記録、地形の発達における重要な地学的進行過程、重要な地形的特性、自然地理的特性などが含まれる。	
(9) 陸上、淡水、沿岸および海洋生態系と動植物群集の進化と発達において、進行しつつある重要な生態学的、生物学的プロセスを示す顕著な見本であるもの。	<知床・白神山地・小笠原・屋久島>
(10) 生物多様性の本来的保全にとって、もっとも重要かつ意義深い自然生息地を含んでいるもの。これには科学上または保全上の観点から、すぐれて普遍的価値を持つ絶滅の恐れのある種の生息地	<知床・奄美～西表島>

図 4. 世界自然遺産の評価基準。<>内は各基準を満たしている国内の世界遺産地域。

4. なぜ白神山地は世界遺産になったのか

世界遺産はそれぞれに「顕著な普遍的価値」を定めることになっています。白神山地の場合、「東アジアに残る最大の原生的ブナ林である」、「第三紀周北極植物群の多くの要素を維持している」などの価値が記されています。なぜ最大のブナ林であることに意味があるのかというと、それは白神山地の登録理由となった評価基準に関係しています。白神山地は、評価基準9「動植物群集の進化と発達において、進行しつつある重要な生態学的、生物学的プロセスを示す顕著な見本であるもの」に相当するとして世界遺産に登録されました。つまり、広大な面積が残されているからこそ、東北日本の極相であるブナ林での進化のプロセスを今でも見ることができるのだということなのです。白神山地のようなブナ林生態系は、かつては東北地方一円に普通に見られた生態系でした。その後、様々な開発によりその多くは失われ、断片化され、最後に残ったのが白神山地だったのです。だから、白神の森はかつての東北の姿を今に残すものであるということもできるのです。

しかし、その白神のブナ林もあと少しのところで失われるところでした。遺産地域を縦断する形で秋田と青森をつなぐ春秋林道計画が1981年に決定されたのです。その後、自然保護気運の高まりの中で、ブナ林保護運動がおこり、全国から1万3202通もの保安林解除への異議意見書が提出され、開発中止、さらには日本が世界遺産条約を批准したタイミングとも合致して、一気に世界遺産に登録されるという流れになったのです。20世紀では、保全のために開発を中止するという事は考えられませんでした。白神山地の世界遺産登録は、日本社会における環境に対する意識変革を示す大きなイベントでもあったのです。

5. 自然と文化の関係性

ではなぜ、白神のような自然は大切なのでしょうか。自然そのものの価値、人間にとっての有用性、そして、自然をどう考えるか等、様々な見方、考え方があるでしょう(図5)。明治時代に“nature”という英語の訳語として作られるまで、日本には“自然”という言葉はなかったことをご存じでしょうか。なぜ“nature”という語はあったのに“自然”はなかったのか。それは日本人が、人間は自然と一体のものであるとの自然観を持っていたからだと言われています。他者として“nature”を認識していた西洋文化とは異なる東洋文化の特性とも言えるでしょう。こうした自然観をもつことの意義は大きいと思います。

秋田には、白神の他にもう一つ世界遺産があります。世界文化遺産『北海道・北東北の縄文遺跡群』です(図6)。縄文時代は、まだ農耕が発達しておらず、人々は自然の恵みを頼りに生活していました。そして、私たちに恵みを与えてくれた東北の自然の中心がブナ林なのです。だから、東北の基層文化を“ブナ帯文化”と呼ぶこともあります。白神山地と縄文遺跡群という二つの世界遺産は、いわば表裏一体のものなのです。自然遺産と文化遺産の二つを世界遺産という一つの制度の中で設置していることの意味は、自然と人(文化)との関係性を重視していることだと私は考えています。このことは、天然記念物という自然物を文化財と位置づけている日本の文化財保護法の考え方にも共通します。

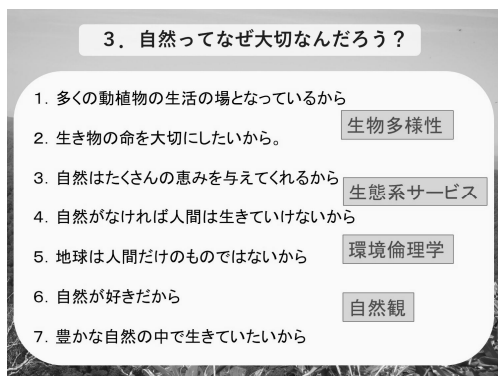


図5. 自然はなぜ大切なのか

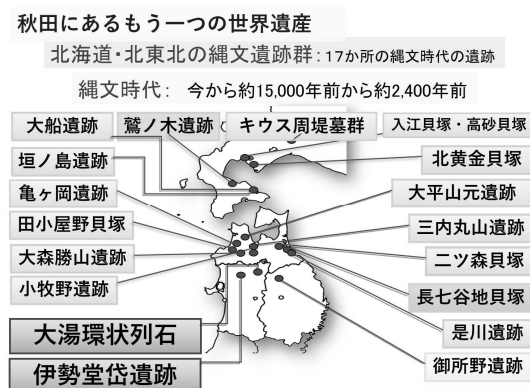


図6. 世界文化遺産「北海道・北東北の縄文遺跡群」
(秋田県文化財保護室による)

6. 白神山地の価値を理解するために

縄文杉というシンボルをもつ屋久島と違い、白神山地はどこを見ればいいのかよくわからないと言われることがよくあります。白神山地周辺にも、マザーツリー(青森県西目屋村)や400年ブナ(秋田県藤里町:すでに枯損)などのシンボルツリーはありますが、それらを見たからといって白神山地を理解したとは言えないでしょう。「進行しつつある生態学的プロセス」を理解するにはどうしたらいいのでしょうか。

たとえば、図7をご覧ください。白神の森を上から見ると、このようにモコモコとしていて「ブロッコリーの森」(斎藤栄作美さん談)と呼ばれたりします。なぜモコモコしているかと言えば、大きな木が覆っている場所や、若木が密生した場所、高木がなくて穴が空いたように見える場所などがランダムに分布しているからです。そして、それは台風などで倒木が発生した場所(林冠ギャップ)に陽光が差し込んで明るい空間ができ、そこで芽生

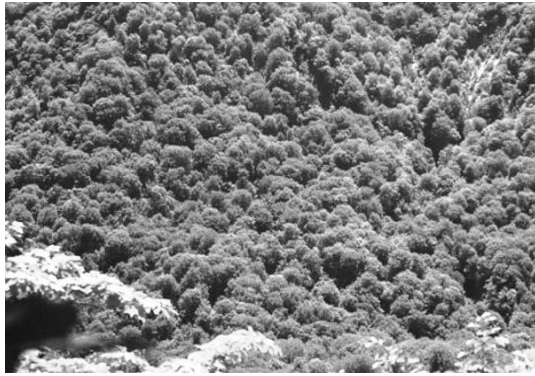


図7. モコモコした『ブロッコリーの森』
赤石川源流域のブナ林（蒔田撮影）

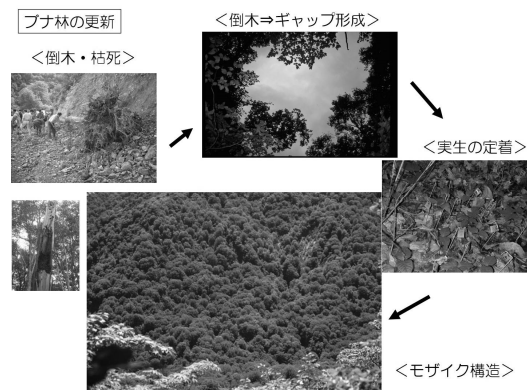


図8. ブナ林の更新様式。倒木により生じた
ギャップで稚樹が育つとされている。

えや稚樹が成長して長い年月かけて再び林冠を構成するという森林の移り変わり（更新）を反映したものなのです（図8）。しかし、ただけでは、なかなかそこまで考えられないでしょう。だから、白神の自然を理解するには良質なガイドの存在が重要だと考えています。生物それぞれの生き方、相互関係、環境との関係、そんな解説を通じて、自然への理解を深め、自然界の不思議さを感じることで、白神の良さもわかるはずです。こうした観点で、秋田県では平成30年度から「あきた白神認定ガイド」養成を進めているのです。

一方、長寿命の樹木から構成される森林は一見全く動きがないように思えます。しかし実際には多くの生物がそれぞれのやり方で生活をしており、緩やかではありますが、着実に森も移り変わっています。その実態を明らかにするのがモニタリング調査です。私たちは、『白神山地ブナ林モニタリング調査会』を立ち上げて、1999年から調査を続けてきました。25年を経て、いろんな変化が見えてきています。私たちは、白神山地は世界遺産なのだから、研究者や行政だけでなく住民にも参加してもらって、「みんなで白神山地を見守ろう」を合い言葉に活動をしてきました（蒔田ら、2021）。ここで詳しく紹介するスペースはありませんが、会のホームページに案内が載せてあります。興味のある方はぜひ参加していただきたいものです。 <https://bunamonihp.wixsite.com/homepage>

7. 次世代に引き継いでいくために

最近、子供たちの自然離れが深刻な問題であると指摘されています。私の研究室の学生の調査では、秋田県でも子供の頃に森で遊んだ経験のある子供は、世代を経るに従って著しく減少しており、それとともに、高齢者世代では、楽しいところ、役立つところだと感じている森林に対して、現在では、怖いところ、危ないところだと感じている子供が圧倒的に多いことがわかりました。こうした状況が続けば、どんどん人と自然との距離が遠ざかってしまうことが危惧されます。なんとかこうした負のスパイラルを止めなければなりません。そのためには、自然に興味を持ち、自然と共に生きる社会を作ることと考えていける人を増やしていかなければなりません。白神山地はそのとても良い教材です。この素晴らしい自然に包まれながら生きていける世界が続くことを祈って、私の講演を終えたいと思います。ありがとうございました。

【文献】蒔田明史他（2021）みんなで見守る白神山地．日本生態学会誌 71:123-131